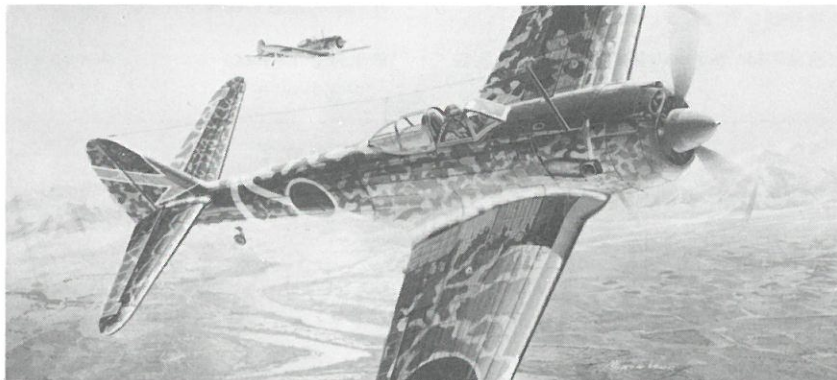


IMPELIAL JAPANESE ARMY TYPE 1 FIGHTER II

NAKAJIMA OSCAR

Ki-43-II "EARLY VERSION"

中島キ-43II 陸軍一式戦闘機隼二型 前期型



1 : 48 FB-2

FineMolds

〈南方作戦の主力機〉

「究極の軽戦」と称賛されたキ27・九七式戦闘機の後継機開発を昭和12年12月陸軍は中島に命じた。新戦闘機に求められた性能は以下のものであった。

- 運動性は九七戦と同程度以上。
- 最高速度は500km/h以上。
- 上昇力は5,000mまで5分以内。
- 行動半径は800km以上。
- 武装は7.7mm機銃2挺。
- 引き込み脚とする。

中島では、小山悌技師を主任として開発に努力したが、軍の要求した九七戦の運動性能を保持したまま上記の性能を得ることは、無理であった。

このまま試作機の段階で消えて行くキ43の運命を変えたのは、迫りつつある大東亜戦争であった。シンガポール攻略のためには1000kmの行動半径が必要で、九七戦の飛べる距離ではなかった。急きょ、一式戦闘機として正式採用された隼は、開戦時には59戦隊、64戦隊に50機ほどが配備された。この初期の50余機が南方作戦を成功に導いたといっても過言ではないだろう。特に飛行第64戦隊は『加藤隼戦闘隊』として有名であり、幾多の戦果をあげた。

当初は対する敵機が、バッファロー、ホーカー・ハリケーン、P-40などいわゆる二流戦闘機だった。それに空中戦では、隼の得意とする『巴戦』に持ちこめたので戦果も多かったが、しばらくすると、敵機もスピットファイアや、P-38など高速機が多くなり、かつ敵が戦法に『一撃離脱』方式を採るようになると、我が軍の被害も増え始めた。敵との速度の差と、特に突込み速度の不足により、前線からは「もっと速い飛行機を」と言う声が寄せられた。戦況に合わせて速度向上を狙って開発されたのが隼二型である。

〈隼二型〉

二型では、エンジンを一型の980馬力のハ25から1130馬力のハ115に換えた。ハ115はハ25に比べギアハウジングが長く、また気化器も昇流式から降流式へと変わり、空気抵抗を減らす目的もあってカウリングが、丸味の有るものに変えられた。プロペラも直径2.8mの恒速式3枚ペラに変えられた。

全長はエンジン架を延長したので約60mm長くなっている。

主翼も速度を増すため旋回性能を犠牲にして両翼端が30cmずつ切り詰められた。同時に翼内部も補強され急降下時に翼にシワが生じる事も少なくなった。燃料タンクもゴム板を貼った防弾タンクと変わった。それは、米軍機に比べ貧弱ではあったが

海軍の『零戦』が五二型になって、やっと付けられたのに比べ進んでいた。

逆に照準機は二型から隼も望遠鏡式から光像(OPL)式になった。風防も再設計されて丸味の有る空気抵抗の少ない物へと改良された。

オイルクーラーは、一型と同じようにカウリングの中、エンジンの前に設けられた。しかし、冷却能力が不足していたのでカウリングの下にも補助のクーラーを増設した。それでは、整備性が悪いので二型前期型の後期生産型からカウリング下のクーラーを大型化して一つで済ませる様に変更している。

脚も再設計され、脚カバーとホイールキャップの形状が一型とは異なる。

二型は以上のような改良をしたが、総重量も増え、最高速度は一型の495km/hに比べ515km/hと20km/hの増加に留まった。

一型から二型に乗り換えたパイロットは「最初、着陸姿勢になると、スツと沈むので驚いた」と言っている。危険なので、着陸時には、エンジンを全閉で滑空する陸軍式を改めて、少しエンジンを吹かし気味にする海軍式にしたと言われている。

昭和17年3月末に3機の試作機が完成した二型は、同年6月に一式戦闘機二型として正式採用された。生産は昭和17年度から本格的になり、中島だけで2,489機の隼二型が作られた。立川飛行機でも隼が作られたが、そのうち何機が二型か不明である。

〈諸元〉

乗員 : 1名
 全長 : 8.920m
 全幅 : 10.837m
 全高 : 3.273m
 全備荷重 : 2925kg
 発動機 : 中島ハ115
 離昇出力 : 1130Hp
 最大速度 : 515km/h
 武装 : 12.7mm×2
 爆弾 : 30kg~250kg×2

〈Data〉

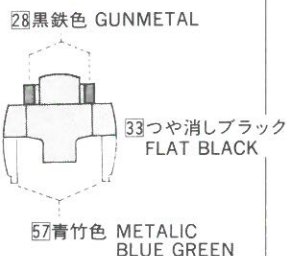
Number of crew : 1
 Overall length : 8.920m
 Wing span : 10.837m
 Overall height : 3.237m
 Total weight : 2925kg
 Engine : Nakajima Ha-115
 Output : 1130Hp
 Max. speed : 515km/h
 Armament : 12.7mm×2
 Capacity to Carry : 30kg~250kg×2

作る前にお読み下さい

- このキットは単二期前期型の初期生産型と後期生産型を選択して製作できます。巻末の塗装図を参考にしてどちらのタイプを作るかを決めて下さい。また製作にかかる前に組み立て工程の全てに目を通して、作業の流れを掴んで下さい。
- このキットには接着剤、塗料が入っていません。プラスチックモデル用の塗料と接着剤を別にお買い求め下さい。
- 各部の塗装はグンゼ産業のMr.カラーの番号(□数字)と色名で指示しています。

- 塗装する際に水性ホビーカラーやタミヤカラーをお使いの場合は別紙のカラーナンバー対応表を参考にして下さい。
- 組み立て図中の各部分の塗装説明は巻末の各塗装例の機体に共通の塗装説明です。
- 別紙の注意も御覧下さい。
- Boxed numbers refer to Gunze sangyo's "Mr.Color" paint color numbers.

◎コックピットの塗装



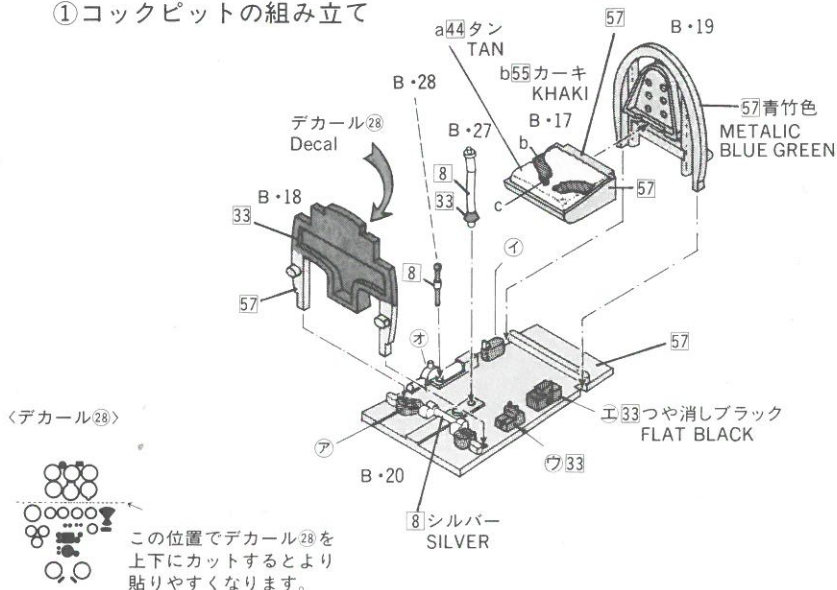
- B17・シート a 落下傘……………44タン
 b ベルト……………55カーキ
 c 金具……………8シルバー
- B18・計器板部分
 ……33つや消しブラックに塗装してデカールを貼って下さい。
- B19・隔壁、背当て……………57青竹色
- B20・床板……………57青竹色
- B28・油圧手動ハンドル……………2ブラック
 中間の太い部分……………8シルバー
 B20上のシリンダー部分……………8シルバー
- B27・操縦桿……………8シルバー
 上端の凸部分……………28黒鉄色
 基部カバー……………33つや消しブラック

- ア・フットパー
 ペダル部分……………33つや消しブラック
 パー部分……………8シルバー
- イ・始動マグネット……………33つや消しブラック
 ハンドル部分……………8シルバー
- ウ・油圧コック……………33つや消しブラック
 コック(突起部分)……………8シルバー
- エ・電磁器……………33つや消しブラック
- オ・油圧短絡コック……………8シルバー

<エンジンの塗装ガイド>

■シリンダーの放熱フィンは暗めのグレー
 [例・32軍艦色(2)]で塗り、薄めたエナメル系塗料の黒色でスミ入れするか、または33つや消しブラックで塗って明るめの色でドライブラシをするとより立体感のある模型になるでしょう。プッシュロッドは2ブラック。クランクケース(B9の明るい部分)は35明灰白色。ギアハウジング(B8)もつや消しシルバー(30フラットベース+8シルバー)や明るめの灰色で塗り分けるとアクセントになります。

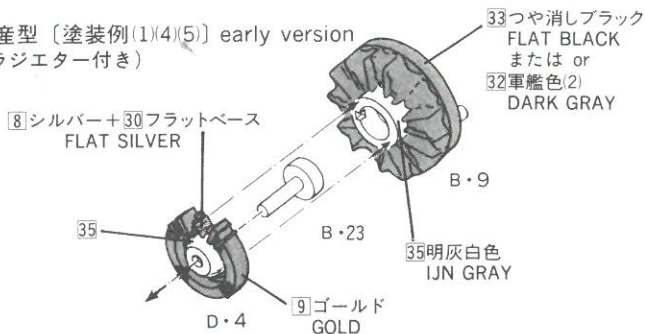
①コックピットの組み立て



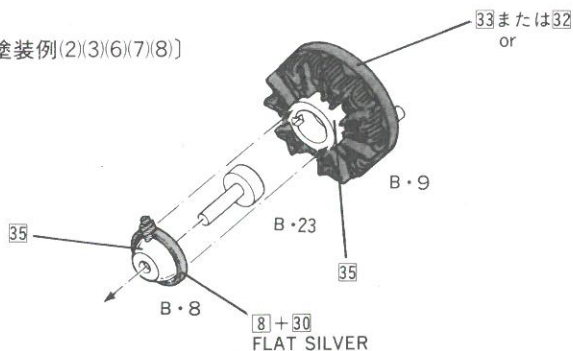
②エンジンの組み立て…どちらか一方を選んで下さい。

※B23には接着剤がつかない様にするとういでしょう。

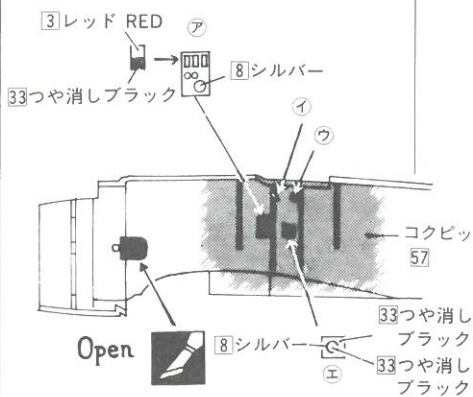
初期生産型 [塗装例(1)(4)(5)] early version
 (環状ラジエター付き)



後期生産型 [塗装例(2)(3)(6)(7)(8)]
 late version



◎各部の名称と塗装



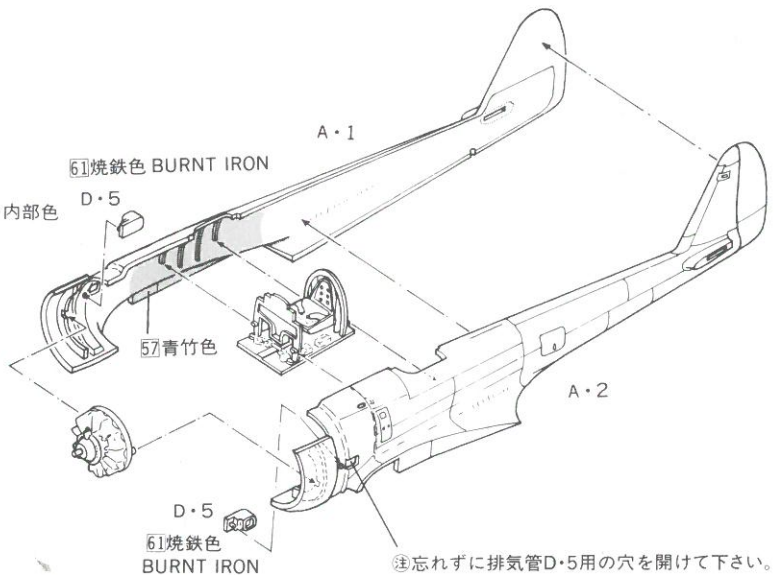
- ⑦・配電盤……全体は、③③つや消しブラック
- ①・カウルフラップ開閉把手……⑧シルバー
- ⑤・無線電源切り換えリレー……⑧シルバー
- ⑧・起動機

<各部の塗装ガイド>

・コックピット内部色について
日本の出版物は、57青竹色を支持しています。が、隼を捕獲テストしたアメリカの資料には、オリーブグリーン(54カーキグリーンと55カーキの中間的な色)に塗ってあったと記述されています。
可能性は、どちらも有るので悩まないように!

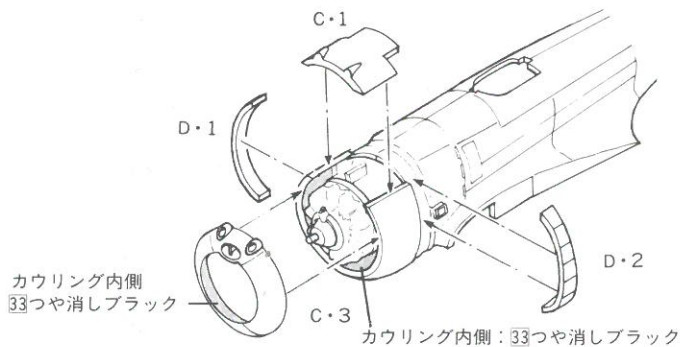
③胴体の組み立て

コックピットとエンジンをはさみ込んで接着して下さい。

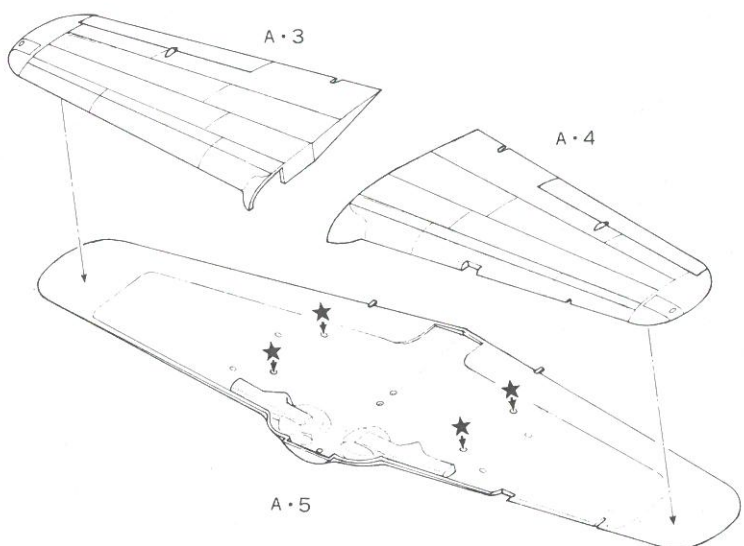


④カウリングの組み立て

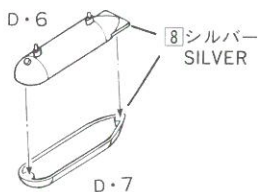
カウルフラップ(D・1、D・2)は、間違えないようにして下さい。



⑤主翼の組み立て…増加タンクを付ける時は★で示した箇所に穴を開けて下さい。



⑥増加タンクの組み立て

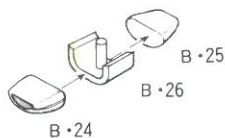


◎増加タンクの塗装

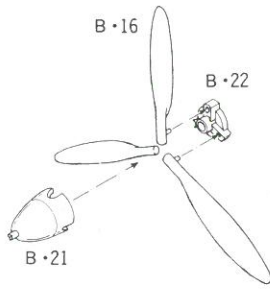
……………⑧シルバー

⑦オイルクーラーの組み立て

※後期生産型〔塗装例2)(3)(6)(7)(8)〕の場合のみ組み立てます。



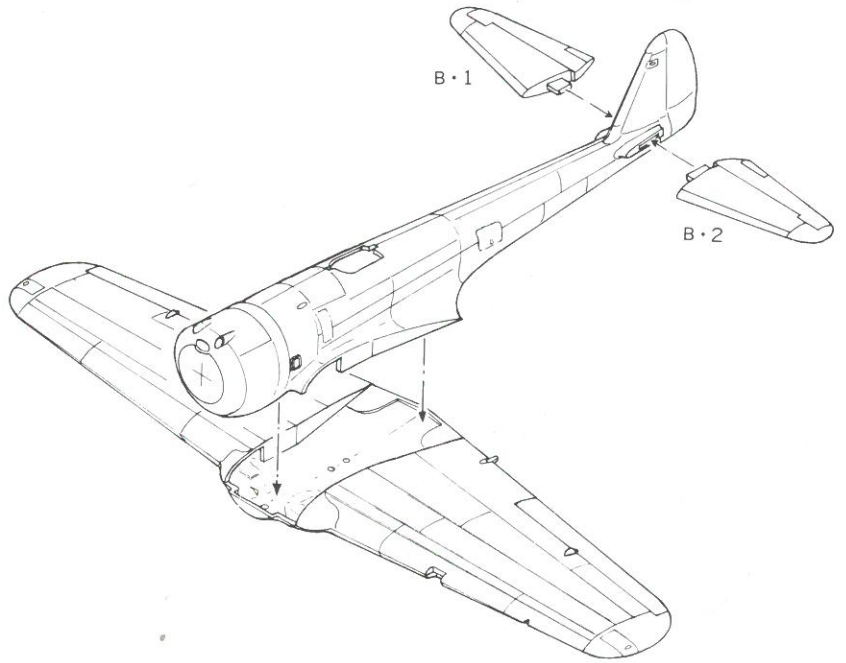
⑨ プロペラの組み立て



◎ プロペラの基本塗装



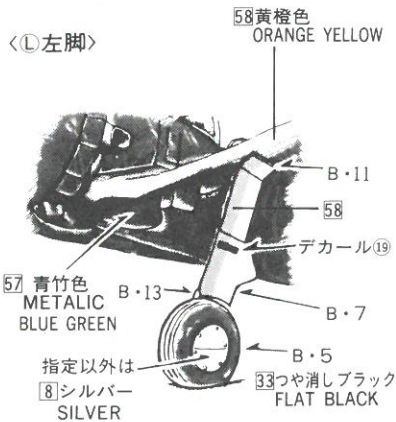
⑧ 翼の取り付け



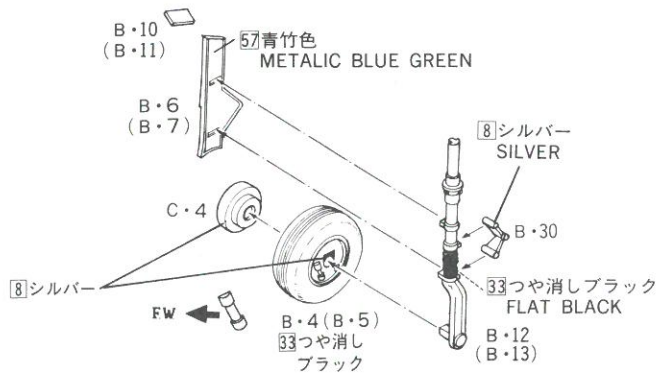
⑩ 主脚の組み立て…左右の部品を間違えないように

※ () 内の番号は左脚用です。

◎ 主脚周辺の塗装



<R 右脚>

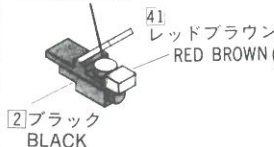


◎尾輪の塗装

タイヤ……………33つや消しブラック
支柱、ホイール……………8]シルバー
基部の防塵カバー……………33つや消しブラック

◎照準器の塗装

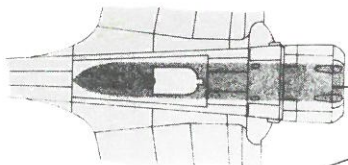
塗装しません。



◎各部の塗装

- 二型前期型は着陸灯(F 4)が無いので58黄橙色で塗り潰して下さい。
- B 14アンテナ支柱…16濃緑色か41レッドブラウンなどの茶系の色で塗って下さい。
- B 15・ビーター管…太い部分は、翼と同じ色で、細い部分は、8]シルバーで塗って下さい。

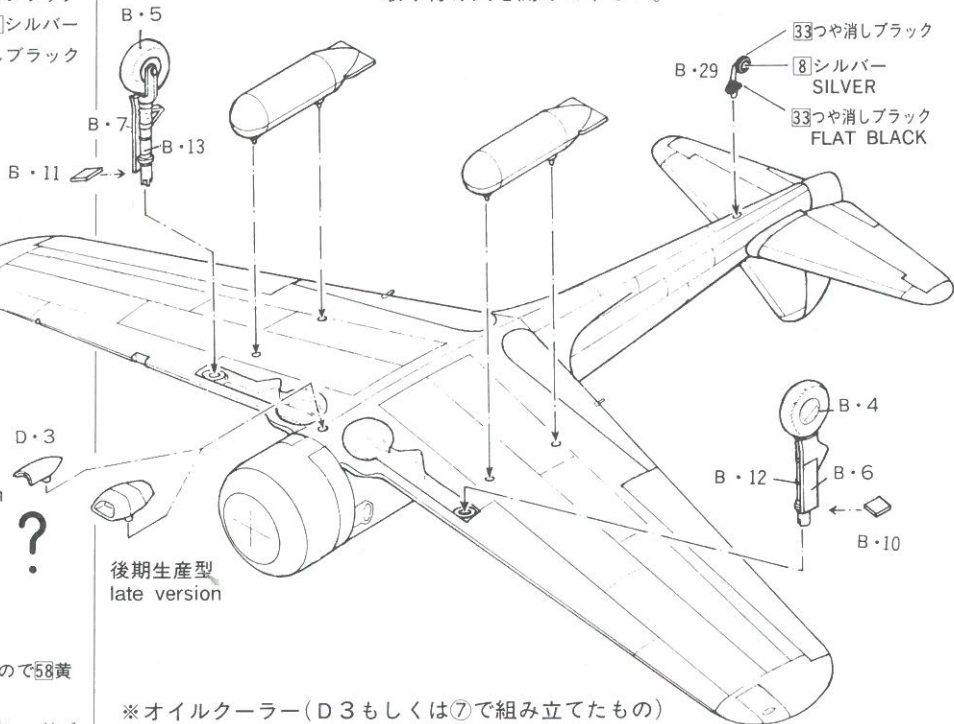
<風防周辺の塗装ガイド>



○風防の中は、ヘッドレスト(C 2)を含めて、防眩の為33つや消しブラックか暗いグレーで塗られていました。ヘッドレストのバットの部分は、41レッドブラウンで塗って下さい。

○風防フレームの塗り方…下地に2]ブラック(フレームの内側は、黒を塗っている)を塗ってから各機体の塗装をしましょう。はみ出してもアワせず、半ガワキの状態です。爪楊枝など柔らかい物で擦れば取れます。乾いてしまってもMr.カラーのうすめ液(ラッカーシンナーはダメ)を付けて擦ればOKです。

11脚の取り付け…増加タンクを付ける場合は、翼を組み立てる時に
取り付け穴を開けて下さい。



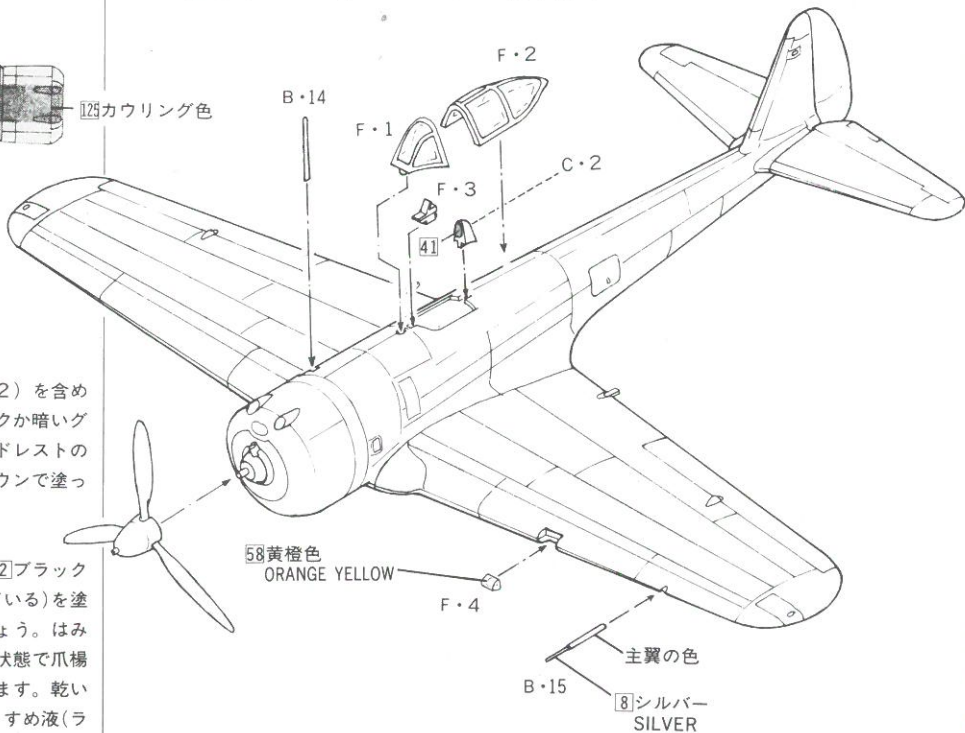
初期生産型
early version



後期生産型
late version

※オイルクーラー(D 3もしくは7で組み立てたものは初期生産型と後期生産型で異なります。塗装例にあわせて取り付けてください。

12キャノピー、プロペラの取り付け



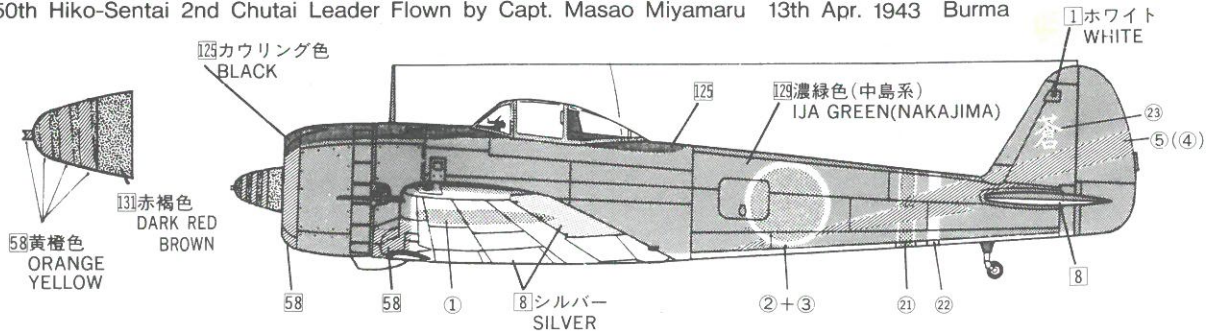
58黄橙色
ORANGE YELLOW

主翼の色
8]シルバー
SILVER

隼二型前期型…塗装とマーキング

(1) 隼・二型前期型・初期生産型(Early Type)

飛行第50戦隊第2中隊長 宮丸正雄大尉機 昭和18年4月13日 ビルマ
50th Hiko-Sentai 2nd Chutai Leader Flown by Capt. Masao Miyamaru 13th Apr. 1943 Burma



<飛行第50戦隊>

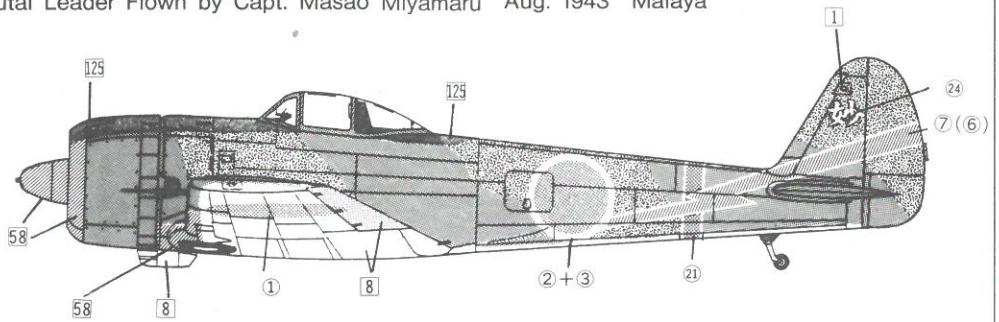
昭和15年9月に台湾・屏東の飛行第8戦隊戦闘機中隊を基幹として編成された。開戦当初は九七戦装備であった為、米英軍戦闘機相手に苦戦したが、一式戦に改造した後はビルマ航空戦で名をあげた。一式戦二型へは昭和18年2月に機種変更し、対インド攻撃、来襲機の迎撃、印支連絡空路への妨害に連戦した。64戦隊と並んでビルマ航空戦の主役であり、同方面での戦隊戦果は撃墜破237機を記録している。

<塗装>

- 上面、側面、カウリング下面：129濃緑色(中島系)
 - 下面、オイルクーラー：8シルバー
 - カウリング前面：58黄橙色
 - スピナー：131赤褐色
- 前半分に58黄橙色のスパイラル線があります。先端のフックも58黄橙色と思われる。

(2) 隼・二型前期型・後期生産型(Late Type)

飛行第50戦隊第2中隊長 宮丸正雄大尉機 昭和18年8月 マレー半島/スンゲイパタイニ飛行場
50th Hiko-Sentai 2nd Chutai Leader Flown by Capt. Masao Miyamaru Aug. 1943 Malaya



<宮丸正雄大尉>

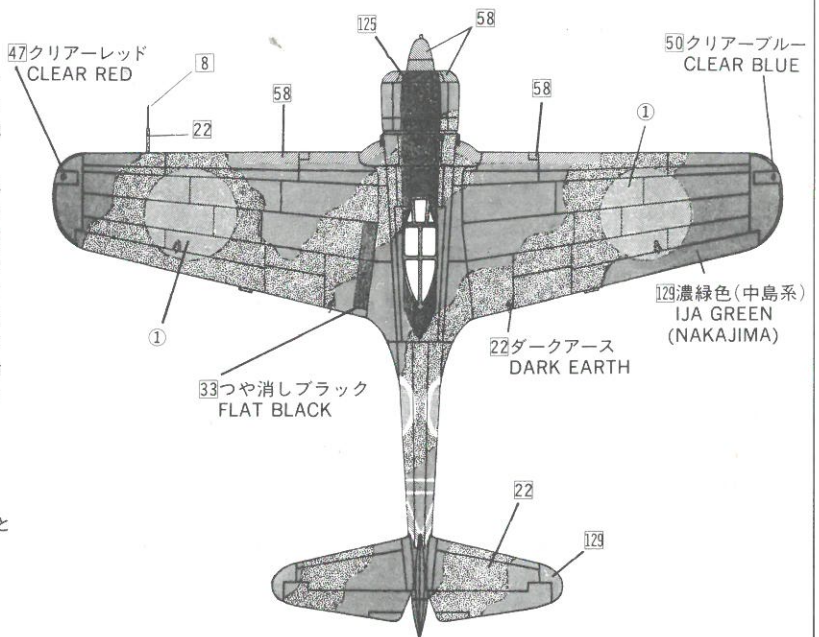
支那事変、ノモンハン事件と戦歴を重ねたベテランパイロットである。飛行第59戦隊から飛行第50戦隊に転属してからは第2中隊長を昭和17年2月より昭和18年8月まで務めた。

特に昭和18年3月31日のバタガ飛行場攻撃では宮丸大尉を含む選抜パイロットの8人の隼を以て約40機のP40、ハリケーンと交戦した。敵機15機撃墜、味方損害なしという一方的勝利をあげ、宮丸大尉自身も3機のスコアをあげた。昭和18年8月にはマレーのスンゲイパタイニに移動して、味方船団援護に活躍した。この後、宮丸大尉は、明野陸軍飛行学校教官として内地に帰還し、後進の教育にあたった。その後、四式戦装備の飛行第200戦隊の中隊長として昭和19年10月に比島に進出したが作戦中に自爆、未帰還となった。

明治45年生れ、岐阜県出身で総撃墜数8機である。

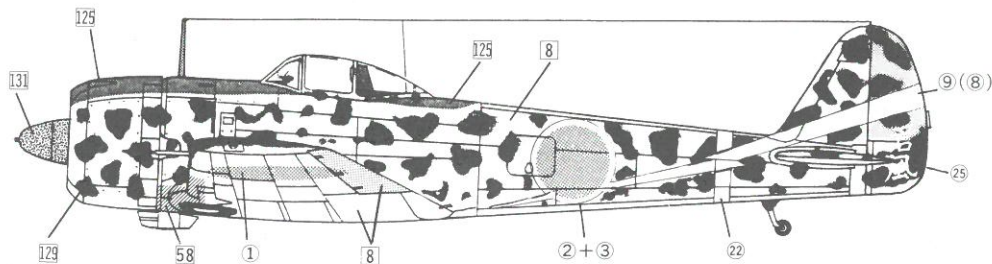
<塗装>

- 上面、側面、カウリング下面：129濃緑色(中島系)と22ダークアースの2色迷彩。
 - 下面、オイルクーラー：8シルバー
 - カウリング前面：58黄橙色
- ※アンテナ支柱は撤去されています。



(3)集・二型前期型・後期生産型 (Late Type)

飛行第50戦隊第3中隊 穴吹智軍曹機 昭和18年10月8日 ビルマ/ミンガラドン飛行場
50th Hiko-Sentai 3rd Chutai Flown by Sgt. Satoru Anabuki 8th Oct. 1943 Mingaradon AB/Burma



〈穴吹 智・軍曹〉

『ビルマの桃太郎』と称された太平洋戦争に於ける陸軍のトップエースである。

昭和16年7月に飛行第50戦隊に配属され、同年10月に伍長に昇進したが12月の開戦時には19才という若さだった。

まず比島航空戦に参加し、12月21日にリンガエン湾上空でP40を1機撃墜する初戦果をあげた。更にビルマ航空戦では約一年で30機のスコアを数えるまでになった。上方からの急降下一撃を特技とした。特に難敵であったB24をビルマにおいて初めて撃墜し、昭和18年3月31日のバタガ飛行場攻撃にも参加し、3機を撃墜した。昭和18年10月8日にはバセイン上空に於て単機でB24とP38の編隊に突入、被弾、負傷しながらもP38を2機、B24を2機撃墜したのち、更に別のB24の方向舵に体当たりした。

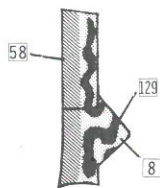
その後、海岸に不時着し、3日後に救助されたが、この奮戦に対して異例の生存者個人感状が授与された。昭和19年2月に本土帰還を命じられ、明野の助教として教育にあたった。大正10年生れ、香川県出身で終戦迄に39機のスコアを重ねた。

〈塗装〉

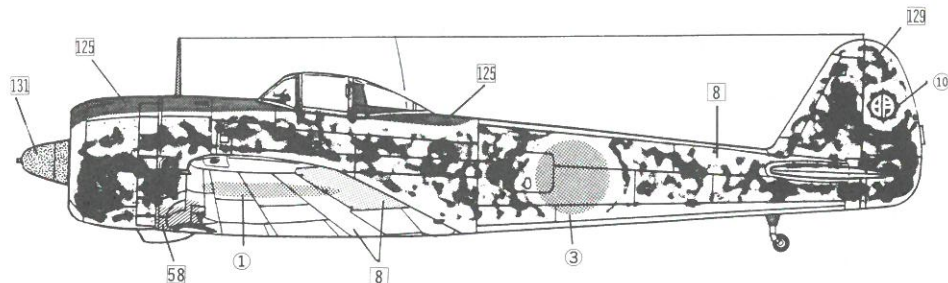
- 上面、側面：[8]シルバーに、[129]濃緑色(中島系)の大きな斑点迷彩。
- 下面、オイルクーラー：[8]シルバー
濃緑色の下面へのまわり込みはありません。
- スピナー：[131]赤褐色

(4)集・二型前期型・初期生産型 (Early Type)

明野陸軍飛行学校所属機 昭和18年 三重県、明野
Akeno-Hikogakko (Akeno Army Flight School) 1943 Akeno AB/Mie Japan



〈脚カバーの塗装例〉



〈明野陸軍飛行学校〉

大正10年4月に先の航空学校空中射撃班を航空学校明野分校として昇格させ、大正13年5月に明野陸軍飛行学校として設立された。

戦闘機の戦技教育を中心として、他機種専攻者への空中射撃、火器、機関生に対する教育も分担した。所沢飛行学校で約半年間基本操縦教育を受け、引き続き射撃学生として明野で約4ヵ月戦技教育を受けたのち部隊に配属され、2〜3年後に中隊長及び教官要員として再び明野で約4ヵ月高等戦技教育を受けるスタイルも昭和初年で確立された。

昭和10年ごろより両コースはそれぞれ乙種および甲種学生教程と呼称された。

また空戦技術の研究、戦闘機の運用法の研究も行なわれ、陸軍で使用した戦闘機は全て配属され、指導する教官も特に技量の高い者が選ばれた。

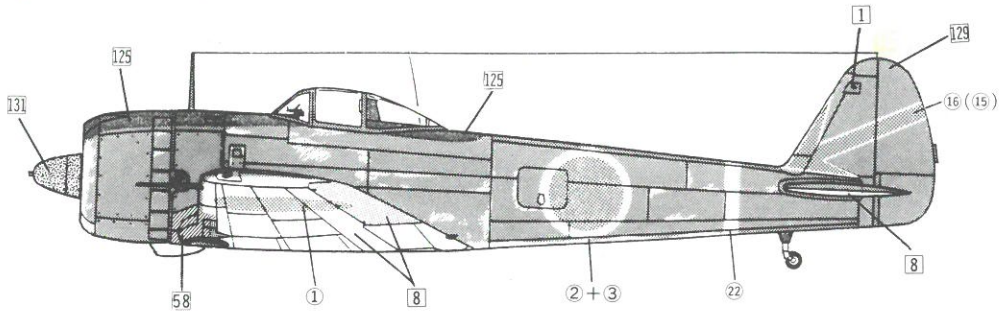
また本土空襲の危険性が出た時は教官、助教の一部を割いて防空飛行隊を臨時編成して自隊の、あるいは中部地区の防衛にあたった。

〈塗装〉

- 上面、側面：[8]シルバーに、下地が隠れるほど濃密で細かな吹き付けによる[129]濃緑色(中島系)の蛇行迷彩。側面の日の丸周辺は白縁ではなく、下地が残されたものと思われます。また、風防の枠にも迷彩が施されています。
- 下面、オイルクーラー：[8]シルバー
※濃緑色の下面へのまわり込みはありませんが、脚カバーには濃緑色の蛇行迷彩が施されています。
- スピナー：[131]赤褐色

(5) 隼・二型前期型・初期生産型(Early Type)

飛行第64戦隊第2中隊所属機 昭和18年 ビルマ
64th Hiko-Sentai 2nd Chutai 1943 Burma



〈飛行第64戦隊〉

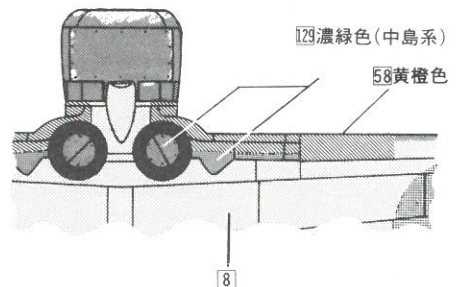
加藤隼戦闘隊として戦時中より広く一般に知られた陸軍戦闘機隊を代表する名門部隊である。

昭和13年8月に飛行第2大隊と独立飛行第9中隊を合併して編成された。以来支那事変、ノモンハン事件で数々の戦果をあげていた。

昭和16年4月に加藤少佐が戦隊長として着任、ついで同年8月末に飛行第59戦隊について九七戦から新鋭の一式戦一型に改変された。12月の開戦以来、マレー、ビルマ航空戦で両部隊の50機余りの隼は、後の400機の隼よりも活躍したといわれる程の働きをみせた。一式戦二型へは昭和18年1月~2月に、立川で改編、明野で錬成訓練の後トングーに帰還し、昭和18年3月よりインド方面への優攻作戦を行なった。開戦以来の部隊戦果は終戦迄に撃墜283機であり、部隊感状も九度授けられた。

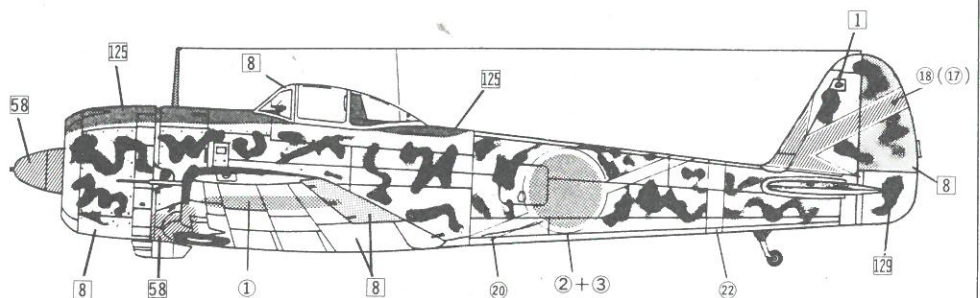
〈塗装〉

- 上面、側面、カウリング下面：125濃緑色(中島系)。
カウリング前部など、所々塗装が剥がれています。
 - 下部、オイルクーラー：8シルバー
 - スピナー：131赤褐色
 - 脚カバー、ホイールキャップ：129濃緑色(中島系)
- ※この機体は、下面への濃緑色のまわり込みが少なく、主翼前縁の味方識別帯が広めになっている様です。



(6) 隼・二型前期型・後期生産型(Late Type)

飛行第64戦隊第3中隊長 榎与平中尉機 昭和18年 秋 ビルマ/ミンガラドン飛行場
64th Hiko-Sentai 3rd Chutai Flown by 3rd Chutai Leader 1st. Lt. Yohei Hinoki Autumn 1943 Mingaradon AB/Burma



〈榎 与平・中尉〉

昭和15年11月に東満東京城の飛行第64戦隊へ配属された。続く昭和16年のマレー航空戦に参加し、第2中隊僚機とともにプレニム1機を初撃墜した。スマトラ、ジャワ航空戦のちビルマ航空戦で負傷し、昭和17年10日に明野の甲種学生として中隊長教育を受け、18年3月に原隊復帰した。以降昭和18年5月より、昭和18年12月まで第3中隊長を務めた。

チタゴン、雲南進攻、ラングーン攻防戦に活躍し、また11月25日に初来襲したP51を攻撃し、不時着させ敵指揮官を捕虜とした事は特筆されよう。11月27日のラングーン上空攻防戦ではP38、P51、B24を各一機ずつ撃墜したがP51に奇襲されて被弾、片脚切断の重傷を負ったが、義足の戦闘機操縦者として再起した。昭和19年に本土に送還されて明野飛行学校で教官として、また教導飛行師団の第2大隊長として防空任務にあたり、昭和20年7月にP51を撃墜し、義足による戦果を初めてあげた。

明野で甲種学生として訓練中に映画『加藤隼戦闘隊』に協力し、藤田進ら映画俳優と交流をもった。大正8年徳島県生まれ、総撃墜機数12機であった。

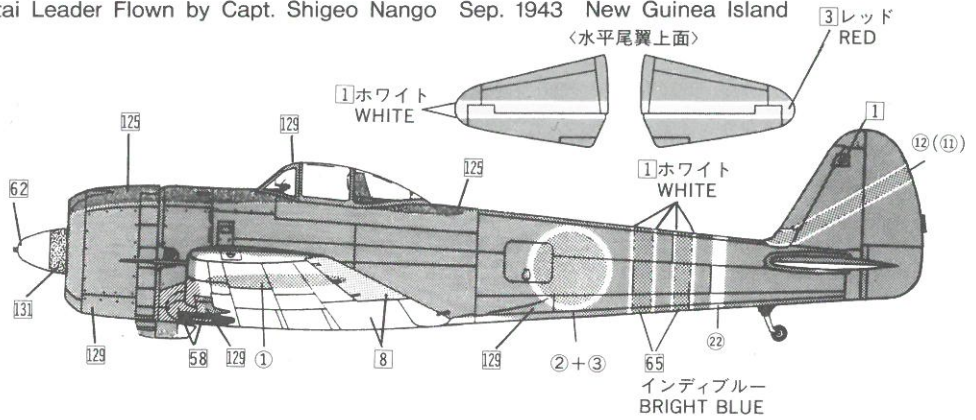
〈塗装〉

- 上面、側面：8シルバーに、129濃緑色(中島系)の吹き付けによる蛇行迷彩。
風防の枠には迷彩が施されていません。
- 下面、オイルクーラー：8シルバー
濃緑色の下面へのまわり込みはありません。
- スピナー：58黄褐色

(7)隼・二型前期型・後期生産型 (Late Type)

飛行第59戦隊第2中隊長 南郷茂男大尉機 昭和18年9月 ニューギニア島／ブーツ飛行場

59th Hiko-Sentai 2nd Chutai Leader Flown by Capt. Shigeo Nango Sep. 1943 New Guinea Island



〈南郷茂男・大尉〉

昭和14年8月にノモンハン事件で前進中の飛行第33戦隊に配属され、昭和17年1月飛行第59戦隊第2中隊長に発令された。部隊は昭和18年2月に一式戦二型に改編し、昭和18年6月のポートダーウィン空襲に参加した後7月にニューギニア・ブーツ飛行場に移動した。ニューギニア航空戦ではP47、P38等質量共に拡大しつつある連合軍に対して激戦を繰り返し、戦隊長の戦死により戦隊付きに昇進した南郷大尉が代理を務めた。また他部隊でも相づく幹部の戦死により、時には4個戦隊を率いて出撃する事もあった。昭和18年9月迄で戦力が半減する程苦戦し、且つ不健康な環境の為に、士気は沈滞気味であった。が、『…てらわず、ぶらず、これほど衆望を集め、上下同僚に愛された人物はまれ』と評され、常に率先陣頭に立って奮戦し、『ニューギニアは南郷でもつ』とまでいわれた。

昭和19年1月17日に59戦隊に内地帰還命令が出された直後の1月23日に、ウエワク迎撃戦で敵大群中に突入、未帰還となった。戦死後個人感状、2階級特進の荣誉をうけた。

海軍の南郷茂章少佐の次弟で、大正6年東京生まれであり、総撃墜数は15機と推定される。

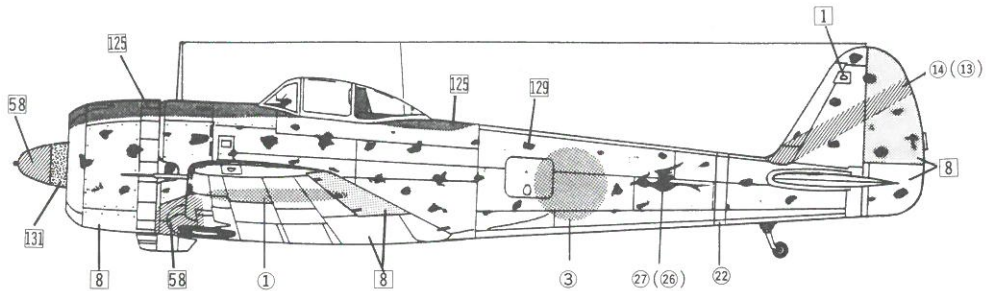
〈塗装〉

- 上面、側面、カウリング下面：129濃緑色(中島系)
 - 下面：8シルバーで、胴体後半部の下面はほぼ濃緑色。
 - オイルクーラー：側面の前2/3は濃緑色で、後ろはシルバー。
 - スピナー：131赤褐色、前半部分は62つや消しホワイト
 - 脚カバー：129濃緑色(中島系)
 - ホイールキャップ：58黄橙色
 - 胴体の帯：前2本の胴体の帯は白フチ付きのブルーです。1ホワイトと65インディブルーで塗装します。
 - 水平尾翼の帯：白フチ付き赤です。
- 1ホワイトと3レッドで塗装します。
- ※アンテナ支柱は撤去されていました。

(8)隼・二型前期型・後期生産型 (Late Type)

飛行第59戦隊第3中隊 広畑富男曹長機 昭和18年 夏 ニューギニア島／ブーツ飛行場

59th Hiko-Sentai 3rd Chutai Flown by Sgt. Tomio Hirohata Summer 1943 New Guinea Island



〈広畑富男・曹長〉

昭和15年4月に漢口の飛行第59戦隊第2中隊に配属され、黒江中尉から空戦技術をみっちり仕込まれたという。南寧作戦に参加ののち、昭和16年12月の開戦よりマレー、蘭印作戦に参加し、昭和18年にはチモール島に進出した。2月ラウテン上空に來襲した2機のロッキード爆撃機を単機で追って撃墜した事で一躍名をあげた。

昭和18年夏よりニューギニア航空戦に参加し、米軍のトップエース、R・ボンクやマクガイアを撃墜した米第5航空軍の49FG、475FGらとウエワク上空で熾烈な空戦を繰り返しつつも幸運にも生き残り、戦果を重ねていった。

昭和19年2月に部隊生存操縦者は内地に帰還し部隊の再建に努めた。昭和20年4月22日知覧基地より出撃途中、乗機の故障により枕崎上空で落下傘降下したが行方不明となり、1ヵ月後、死亡が確認された。

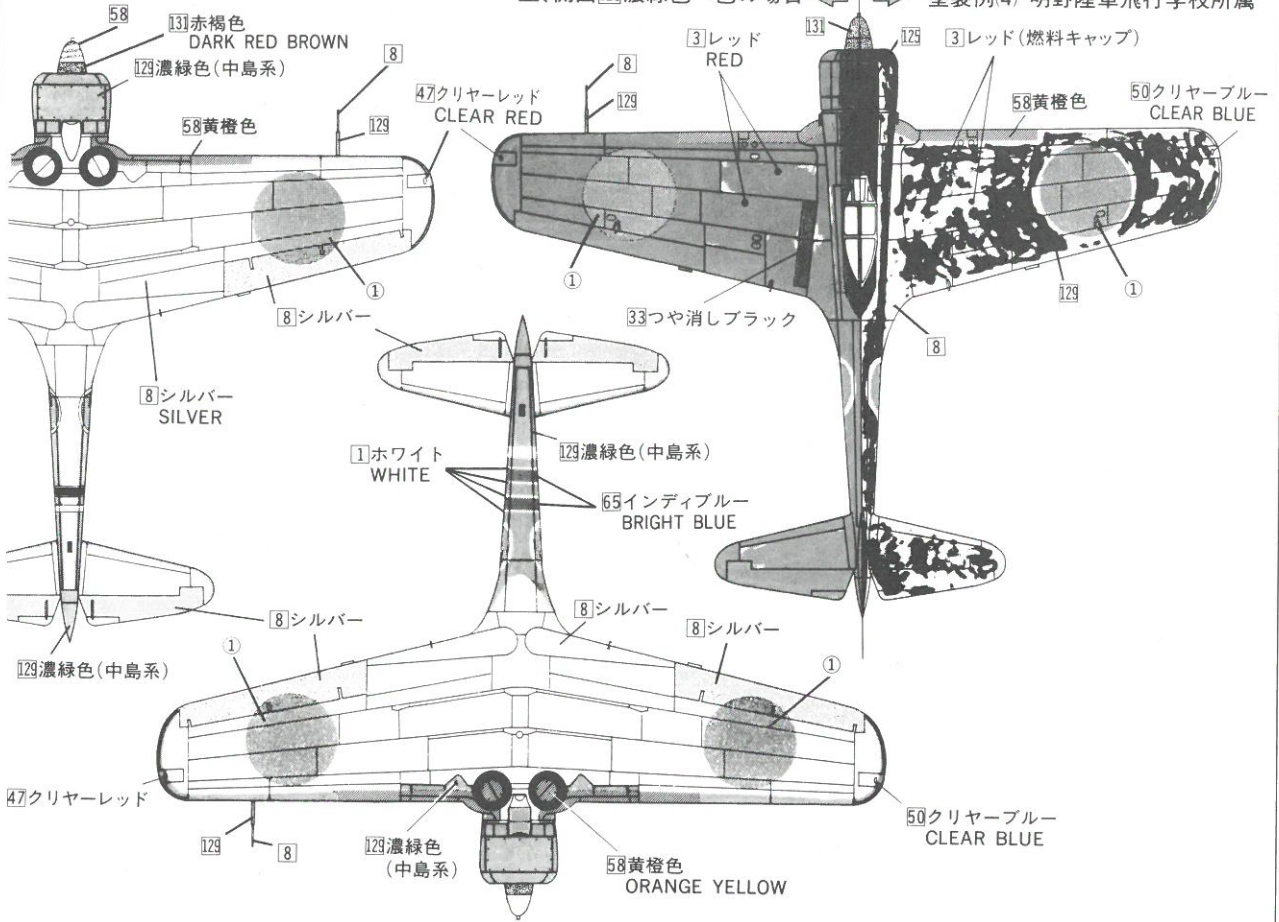
大正6年福島県生まれの明郎快活な好青年で、5年間連続して飛行第59戦隊で戦った。総撃墜数は14機と推定される。

〈塗装〉

- 上面、側面：8シルバーに、129濃緑色(中島系)のまばらな斑点迷彩。風防の枠には迷彩がかけられていません。
- 下面、オイルクーラー：8シルバー
- スピナー：131赤褐色、前半部分は58黄橙色

(1) 隼二型(前期型)初期生産型 宮丸正雄大尉機

上、側面129濃緑色一色の場合 ← 塗装例(4) 明野陸軍飛行学校所属



(7) 隼二型(前期型)後期生産型 南郷茂男大尉機

※翼端灯4750 は各機共通です。

◎パイロットの塗装

〈防暑航空衣袴〉

薄褐色の綿布製航空衣で、上衣とズボンは別々で構成されていました。上衣は両脇に通風孔を持ち、肩のボタンで袖をまくり上げて止める事も出来ました。裾はゴムで絞っており、ポケットにはフラップが付いています。またズボンも風が通りやすい様に裾まで広い普通のズボン形式のものでした。主にニューギニア、ビルマ等の熱帯地方で使用されましたが、酷暑の為にこうした防暑航空衣の他に半袖半ズボンの防暑衣、航空衣袴、半長靴だけで出撃する時もあった様です。



部品を請求される方は、氏名、住所、電話番号を1字ずつはっきり書き、下のカードの必要部品を○でかこみ代金を現金書留又は定額為替にて、当社アフターサービス係までお申し込み下さい。



ファインモールド

〒441-3301 豊橋市老津町字的場53-2

TEL : 0532-23-6810

<http://www.sala.or.jp/~fm/>

※予告無く価格に変更する事があります。

陸軍一式戦闘機 隼二型前期型

A 部品	1500円
B 部品	1300円
C 部品	1000円
D 部品	1000円
透明部品	600円
デカール	1200円
解説書	300円

For Japanese only

FB-2

